

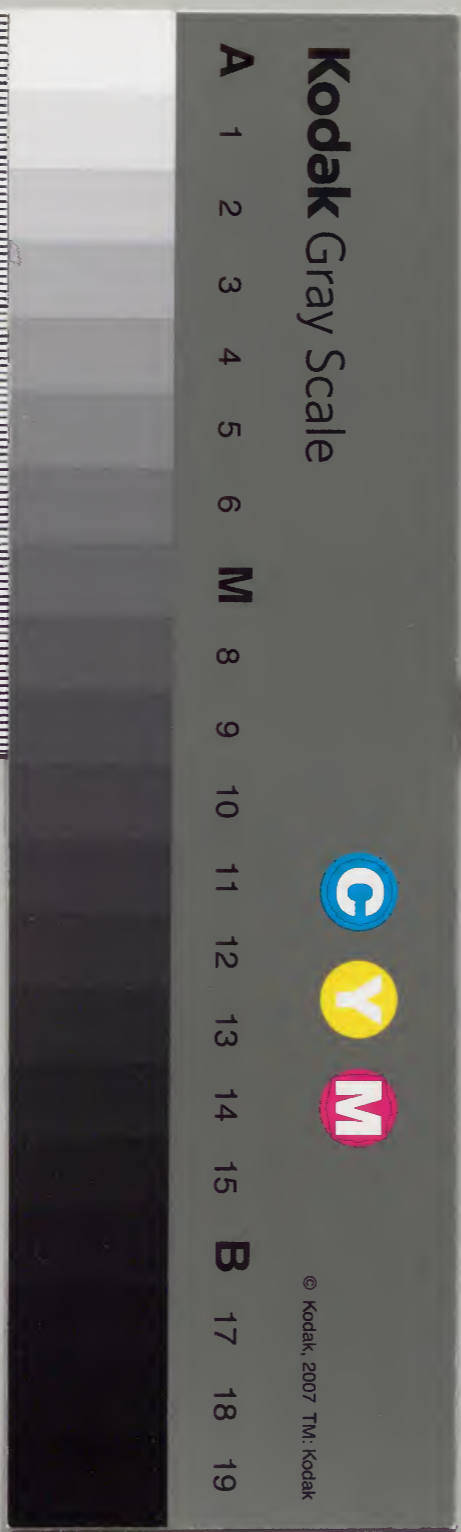
甲冑製作辨

中

				和書門
			一七二〇	類
		三	函	
	三	架		
三	冊			

庫	文	閣	內	
一五四		一七二		和
函		二		書
六	三	〇		類
架	冊	號		

內閣文庫	
番號	和 17220
冊數	3 (2)
函號	154 36



中古甲冑製作辨卷之中

塊之品目

大圓山 大星塊之事

大圓山 大星塊之事 大圓山 大星塊之事

天空の穴 大星塊之事 大圓山 大星塊之事

是天 大星塊之事 大圓山 大星塊之事

四天 大星塊之事 大圓山 大星塊之事

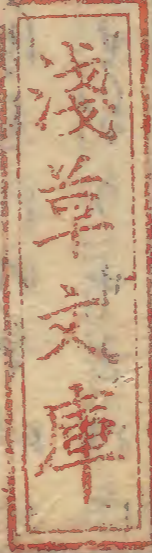
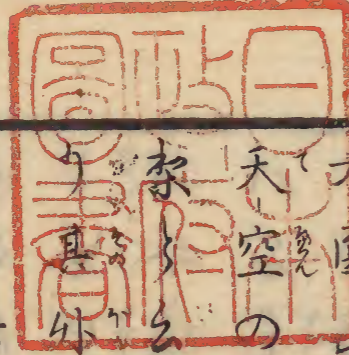
吹返 大星塊之事 大圓山 大星塊之事

吹返 大星塊之事 大圓山 大星塊之事

吹返 大星塊之事 大圓山 大星塊之事

吹返 大星塊之事 大圓山 大星塊之事

吹返 大星塊之事 大圓山 大星塊之事



中古甲冑製作辨

包葛蒲革色革等少多なり革法合せ目よは色を
交つて伏組を縫花鏡めて打覆輪をうぶ也夫故
且上代以胃此眉庇小捻返ちか中古如士以形
能塊を用い此形此塊大圓山と名は事
如何悟が疑は函人此所見此下高勝
と思はる古史の證據と此山平頂山前勝山後勢山天谷山杯と云胃此か
此名を大圓山と同一く名は事由縁を志は
今この俗此等以名を以て品を分はゆ一暫俗は倣
此名を以て品を分はゆの之れを古代の大圓山は
塊ハ腰卷ハ後ののり合せき家と此れを明珍
家宗より十代ののり合せき後合せきり中古如作

一丁目ノ事

も前より腰卷以合はるり又近代に至りて邦道
より紫も古代如大圓山を質て造故古代に似せ
腰卷を後より合はるり也從夫未ハ皆後合はる
也明珍家古代の作り宗より十代目宗安迄
ハ天空此穴廣し十一代目義弘より未中古以塊
名天空の穴狭し又近代邦道より後ハ替り所も
より古代より真似て穴を廣くはるり是全穴如
廣狭の差別を志はるり家故れり素付けはるり
古今天空如弁を志はるり
先塊ヲ被ルニハ髮ヲ亂シ鉢卷ヲシメ扱塊ヲ被
ルト云事世人ノ知ル處ニシテ如何ニモ中古永

中古今製作用

禰天文ノ頃十トヨリ専仕来ル處ニシテ武者振
 勇々敷思ヒキリ死ヲ究タル姿ニシテ甲斐々々
 敷見ヘテ勢ヨシコレハ中古ヨリ今ニ傳ヘテ是
 ヲ用ユ古代ノ被方ハ是ト異也今ノ心ニテ古代
 ノ塊ノ天空ノ穴廣キ用悟力夕ニ因テ古ノ被リ
 様ヲ記
 古代ヨリ源平ノ頃其後足利家ノ中頃迄モ人々
 髪ハ不刺シテ結ニ毛頭上百會ノ夕リヘトリ
 アケテ先モ不曲元結ヲ永ク元取ノ先迄巻置夕
 ル十リ後三年繪巻物ノ古画ニテリノ体ヲ見ルヘシ其上ニ烏帽子ヲ被夕ル上工
 塊ヲ着夕ル也烏帽子不着時ハ手拭様ノ物ヲ眉
 疵ヨリ天空工引入内ニテ結テ夫ヲ受ニシテ塊

是モ後三年ノ画ニ多ク見ユ四方へ引ヘタレモ見ユ
 是ハ塊ノ鉢ノ板ノ威毛ノ脚ガリヒキレシナラン

ヲ被夕ル十リ是モ後三年ノ画ニ多ク見ユ四方へ引ヘタレモ見ユ夫故古
 代ハ塊ニ受張ト云物曾無有、如頭上ニ髪ヲ結
 故髪毛多キ者杯ハ塊ノ内工髪ノ結節衝張壓テ
 痛ム故天空工先ヲ出シテ被シト見ユ此モ後三年ノ画ノ一人見ユ
 長門本平家物語十四卷越中國任人官崎大郎力
 痛子入善小太郎平家士大將高階判官長綱ト
 組テ組シカレタル時叔父別府次郎為重落會テ
 長綱カ塊ノ天空ヘ指ヲ差入元取ヲ擢テ首ヲ搔
 トアリ長綱以時ハ烏帽子着ナリト見ヘテ髪、
 先天空へ出居夕ル證據也古塊ニ受張無事モ又
 爰ニ明カ也古ノ人ヲ元取ハ頭上ニ在今ノ人ノ
 元取ハ後ノ邊ニアリ夫故古モ元取ノ任所今ト

中野氏傳卷之四

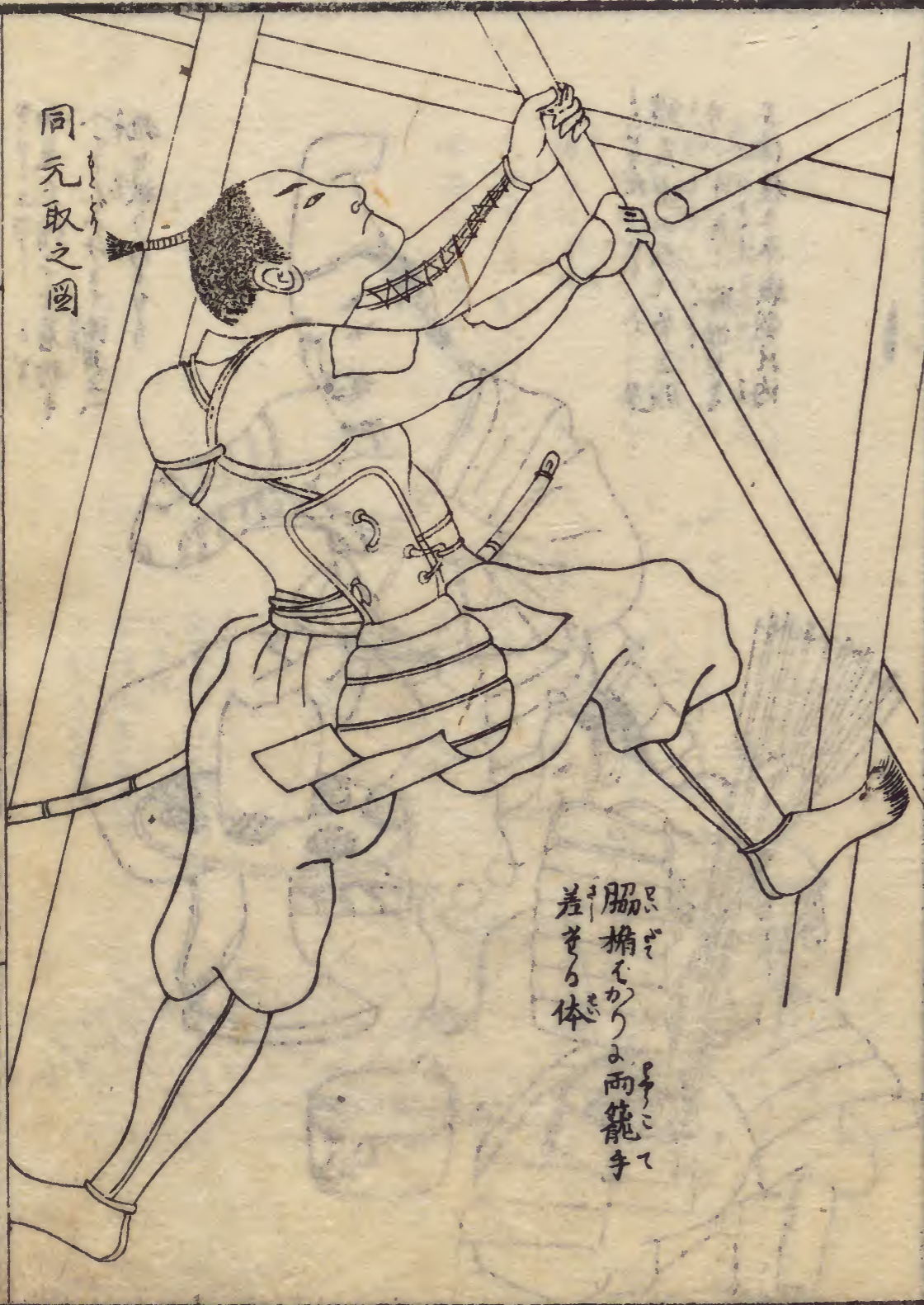
同ト思フ心ニテハ此条杯ハ普通ニ不濟文也
 今ハ天空ノ穴リ用更ニ無夫故ニ狭ク成タル也

後三年戦圖之内

古の髪元取の体



同元取之圖



脇揃えかりの両籠手
 差さるる体

伊古伊古製作中

如是烏帽子を着折る
（てうまがひまて 浩其上）
地を被りたるツリ

鐘直垂の左此肩を脱
片手差 脇指甘き
不体後三年戦國の内



烏帽子不着者ハ如是
布を眉庇（しほ）引合
て浩夫と受まへて地を
被りたる体
又四方より引入たるを
右後三年國の敷を見ゆ

天空より元取出
右後三年戦國の
下巻よるゆ



中古ヨリハ人々月代ト云事初リニ故塊ノ被ニ
 受張ト云物ヲ仕出セシナリ受張出来ニ故塊ニ
 ノ山高クナリタリ山高ク成タル故力革ト云物
 仕出セシナリ今時モ堂上ノ人ハ皆古ノ如髮ヲ
 不刺頭上ニ元取ヲ結也俗ニ冠下地ト唱ル也古
 ハ惣テノ士諸人共ニ髮ハ其通ト心得ベシ今ノ
 塊ニ天空ノ穴入用ナキニ筋或星塊ノ類ニ天空
 ノ成タケ狭ク為スヘシ無穴ニ然事ナシ周テ穴ハ
 上田七本鎗ノ一人鎮目市丸衛門惟明ノ塊ハ天
 空ヲ裏菊ノ金物ニテ張塞テ有_{二十八間ノ筋}古モ塊ノ
 形鳥帽子形ノ鉢_{宗安作ト見ユ}ニテ濟シ也是ハ山高

故元取ノ障ル事無故鉢ニ無穴也是ニテ天空ノ
 穴ヲ穿ツ由縁ノ用ハ知レル也今ノ塊ニ不用ノ
 穴ヲ穿其差別モナク打見處ノ觀美計ニ天空ノ
 鏑ヲ儲ル事甚心得又事ナリ
 又天空ノ穴ハ息出シナリト云人アリ頭上ヨリ
 息スル人ヲ未見縦意氣漏_{モセヨ}力革ヲ
 十文字ニ穴ノ通りニ張百重差ノ絹ヲ漆付ニ
 タル事ナレハ意氣モ出_シ本来ノ意味ヲ不知
 説也又云塊無穴則水中工落入_ニ時上_ニ水抜又故
 桶ナド_シ水_中一俯タル如塊ニ水スイ付テ沉
 事ナラ又故自在ナラズ夫故穴ヲ穿_ト云説モア

中世時勢雜考

リ此説不審僅亦七寸計人鉢ヲ水ニサヘラレテ
 十五六貫目以上ノ骸ヲ上ル事アルヘカラ
 不恐ハ無誓ノ説ナラシ信用ニカタク此等ノ
 説モ受張ナクハ水モ抜ベシ百重瓦ヲ漆付ニ任
 タルニテハ水モ抜ベシ無穴同様ナレベシ
 ○高勝山塊之事
 此形ハ明德應永の頃少衆出来きり大圓山の形と
 遠鉢如脇と云ふ山を高くす人如天窓如
 形ノ前高かふと前勝山とい後高きかを後勢山
 とい頂子平りか平頂山とい頂凹なり天谷山
 かと名はる呼の類長門守邦道少衆如極札ニ書

始一事ホク古ノ衆か云々其ありて古代ニ三
 十三間希よわ其間を一倍ありて六十三間等以
 頃より出来きり十代目宗安より形を替て其次十
 一代目義弘より高勝山とい形ニ替り也宗安作
 小香爐以形をかきり寫しきり物あり宗安
 頃武家と甚華驟なり時少物毎花美を好し時
 故々宗安作ハ筋を減金の銅等少て包品垂等威
 垣等物多く鉄操も至く細世は宗安より急が
 り手際至く上手かり武家優美より急が
 時より一以時代は甲冑如製一変せし衆
 ○六十二間第塊之事

中御所御製御用御書

上代以塊去星を止り星めりき候鑲を厚さ此か
 一丁一鑲厚みそ目方此増は勢子夫一筋鉢と
 云物めりありあり間を細かして一枚重小り候を
 ろり鑲炮盛人成し故利用多し六十二間ハ星
 希なり若おま成重し信家作小あ奈然れも小
 星也三十二間ハ星を交り候し
 ○七十二間筋塊之事
 七十二間と七十二候を表候も又上手故造りも
 又大將以着具も云不知何是星と無を以なり義
 類の作の七十二間六十二間ハ高肉と上よかさ
 り候板ハ上よかして一丁つらと及りを以候下り
 板と名間をうけ出出来候板よと候なり是を鑲炮

玉比中より候時よ上よ重る板去せり此をばむめて
 玉比勢ひをくく下りの板も受留候道理を義
 通之夫一と造り始り義通り未如義類みか
 高肉おま右高肉をり候むらハ響此穴なり稟心を
 通ハ腰巻際追はり物なり信家と同時代かれも
 高肉れ一夫故信類ハ惣て高肉れ一信家と嫡家
 故義通ハ子夫を用ひ候も一なり義類も三十二
 間ハ高肉れ一枚此板厚故高肉ありてと重過
 候故れ事
 ○八枚張塊之事
 前後板一枚宛左右板三枚宛以上八枚なり形
 高勝山以如し天空の穴無もあまを四天紙響以

穴もわがごとく又百列物とて一度は百列宛張多し
物あり尤數物なり銘此有とあり信家義通此作
此時代は戰國此頃故甲冑此用鑿と紙慮之
眉庇は日根野流とあり本眉庇とあり

○三枚張塊之事

前より後迄一枚左右一枚宛都合三枚也眉庇日根
野流也質下品なり數具足は此塊を用也天正之頃
も歷は此人用いられし物なり既は薩摩守忠吉卿
以御塊三枚張也今美濃國岐阜より利用守なり物也形容此位
りも故人と不好といふも看用は可用者なり

○百二十間塊之事

信家此作は見えり又南都住根尾正信と云作は

百二十間は物あり六十二間は張て三間は數多
き故上は方一ゆゑに兵並乱行よし也ゆゑ
百二十間に至るは細工自慢はよし去る却て利
用を失は正信は治世此人なりれば利用は考ふ
細工は手際迄は事なり兵の本式は加へるなり
と云説あり夫故操兵針は如し不好物なり

○加賀越前奥州塊之事

明一珠家此外作は事作を好む人も不用といふも出
来は宜しき着領は了る舊を用也了る奥州鉢は六星
越前加賀鉢は六星あり座星ありかやち何は茂
高勝山此類なり仙臺伊達正宗は代明一珠加賀大
椽宗定と云者を被抱五百石は椽を賜ひ屋敷地

神皇正統記卷之四

北

乙廣大賜ひく其門人數人あてく甲冑を多く造
 る今從奥州來る所名仙臺明并塊寺も彼門人も
 如造る所れり宗定と雪下久家此門人あて造
 宗定の家今之断絶以亦奥州岩城赤江谷と所
 左近義通の門人吉道が任居之地なり是は岩城
 吉道と云其子孫内藤備後守如領地あり刀鍛冶と
 成く明珍次郎兵衛と云其子津輕越中守如函人明
 珍宗賢也先祖より七代如孫也宗賢の子今は長門
 宗政江戸一來りて本家相續も大隅宗妙が養父也
 此外中古英雄の將士物數奇如塊異類異形不逞
 牧拳因て畧之

○塊鉢之大意

先作を吟味しに重き利あは作物を重し輕き
 之作あれども輕過ぎる悪し成重か如し宗安杯も
 義通信家より輕し又國張分より重き表を衆重
 過ぎるを思ふ凡四百目より五百目迫より尤輪
 を除く鉢よむは多く志海り表を用ゆは一也
 心以ておもむ損に安しむは目を利する高勝銀
 の所を目ざしよし左右此を改むべし鉢此
 志由りて塗き鉢ゆへ見え以裏めて見ると少し小
 くも透あかき錆出てわね扱叩て足をも知れり
 びりんとむくハ思ふに忍根緒如銀のゆきと味ら
 其銀如響く音有とあり其了簡より塊星此見え

城 妙見星 星此見一勢と盡辰星云なり 古史雜
記 ともよ此名目比所見ふ一全く函人等々名は中
之 以多ん然れども今専軍家者流めて唱ふなり衆

鉢之表十一條

- 塗之事 精之事 筋并足之事
- 天空之事 四天鎮響之穴之事
- 品重之事 高勝鏝之事 威垣之事
- 眉庇并見揚之事 御拔立之事
- 腰卷之事

○塗之事

鉢 如表ハ塗きふをう〜〜古代此鉢ハ塗ら勢ハ

一 中古此鉢ハ不塗〜〜鍍精なりも希よあり塗時
 与 兩露霜雪或も炎天も格別以強之なり也塗
 以 仕松ハ初製作心得七ヶ條ハ出次艶無蠟色を
 絶 品ハ次ハ中古用いざるもあり練も塗此最上なり
 艶 無よも時ハ塵は〜〜疵つらぬ〜〜研出〜〜も
 あり 手艶〜〜云尋常ハ蠟色ハ類ハ紫慶長法
 頃 花塗を用いざる塗立蠟色もわり然れ〜〜も數
 物 類ハ少〜〜領物ハ不好又鍍白檀〜〜地鍍を
 研 立て白檀漆〜〜塗事あり然れ〜〜も濕を受る也
 後 此精出は者也道具自慢ハ〜〜事也〜〜これ
 ハ 燒物ハ疵物を〜〜塗き物あり此所ハ心と自
 古 作ハ〜〜吟味を〜〜夫故ハ骨ハ眞實を足

とふきえん心條流らぶりて不塗一々鍍鍍法中
用らる全く道具自慢りり自己以嗜よせん小骨
委あく吟味く表裏く塗く所持と

○筋并足流る事

譬バ六十二間の塊を六十二枚板を造り一枚毎に
撚糸返しを以て夫を張立ゆ故其一枚毎に撚り
返一段よ筋成也天空此所よきてハ空此見込
撚り返し斗んゆ故見込厚く尺えり義類を皆以
趣なり信類を張留際一むる程次第に撚り返し
故ハ空此見込撚り返しゆりて見込鍍薄く尺也
昔より榮花の如く見ゆ也成重杯も信類と同板
よ撚り返しを摺消るる一体の鍍以厚薄もようべ

早し女又國張の筋以宜もあり作よかき事ハ
三十二間よ張るをあいふ一間宛筋以隔て十六間
筋を顯次もあり亦八間よ張立漆を筋を置て六十二
間或ハ三十二間よ見せるとあり表かき尺と志れ
裏より尺を古代より十代自宗安迄ハ筋よ真鍮覆
輪を取らると多くなり義類よ至りてハ覆輪筋ハ希也
惣て甲冑ハ覆輪を取らる事ハ中古より穴は多く出
来ゆ事ハ厭ふ故なり眉庇杯以覆輪片ハ切れ杯
ハ垂れ下りて眼よまき付物故止るると古老此口映り
亦筋斗一塗くをを用ひるとあり下地よひく
きせ物をかき高肉ハ其儘尺せく塗立るる物なり手間
以費至く貴し

筋を前へつむむをうへと後の方へかゝるは足踏ふなり足
を足流るもいふは其の筋をうへと後の方へかゝるは足踏ふなり足



此趣は筋足前
もむむとひ



此趣は筋足後
かむくを足なが

○四天の鉄もいふをうへと後の方へかゝるは足踏ふなり足

四天の鉄もいふをうへと後の方へかゝるは足踏ふなり足
古代は大圓山の鉄も殊更に其内は義類を信類

う祭はあが承りなり早し女類もあが承りなり早し女類
れ鉄を作物に質は四天の鉄れあがりきを悪んで
志腰をきり腰巻を仕直し質は表よりを知らし裏か
ら入るとあれれり似せ物を裏操の鉄五通りなり祭惣て
操鉄も六通りありとある一は金星の類に鉄教を以て異也
四天鉄の下は小に穴あり夫を響の穴と云其穴より組
緒を出し置り其緒を締ると是は死去廻亦兩具等を
付所為なりと云付所時と其締めて引廻し緒をかみ締
以先を四天に鉄へかけく留る物なりと云以説信は
義類を格別信類の鉄も丈も短く先細く尖る故締を懸
りて甲州楯無は塊は二三つあり御嶽の古塊は二三つも

二穴二つ宛あり又穴以無とあり四天一鉢を古代の鬼よを
 宗一入より後の作は四天鉢ありけり極くあふよもあ
 らば鉄無とあり響以穴ふきとありと心得一穴よ急を
 引入以置を氣抜く宜いと云説もあり打れそり時響以
 内一ふぬ故に穴を穿はくと云其説區一後とせり
 鬼以内を氣を漏るを免以穴く其穴以雨露の雲をく
 亦き免を鉢ふり一夫を四天の鉢と名けり事ハ鬼を神物
 たりて八幡座と天空を唱一三光の鉢杯鉢を山とんく四
 所以鉢を須弥空四天よかしてりて四天の鉢と唱一せり
 物ゆん以類以名函人等みきりよ名付きりて丈夫
 以評よふよ及ふ事りん

○天空八幡座之事

上代と中古と以天空を形異り大圓山冑以茶の詳よ
 弁次古代を八幡座と唱一以鬼天空と唱えり八幡座と
 唱一呼の類ハ後世の函人等以名けり也今ハてて天空
 をハ幡座と云り金具も古代中古とも四重やよして
 低一古代ハ鉄ゆく臺座を打りふり山椒鉢の類ゆく打き
 り臺座も多々葵座けり鬼を枕よあふると云と諸史記録
 よ多くんえり低き事を悟以中古とも其遺製あり
 て臺座を唐花菊花にけり雪かど此類ゆく其次をゆく
 菊透菊切羽玉縁と四重ゆく隨分低く志る物也近
 世を九重座程よりて須弥座わけ玉の類飾あり不好事也
 亦天一之頃稀よ鍍ゆく造りき物あり是ハ不好事也
 此かな物を強いぬ飾了金具りるよ一強弱あり

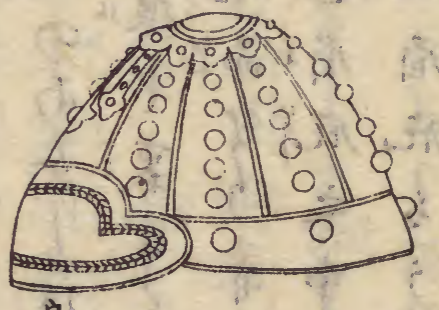
○高勝の鑲之事

塊以後、あふ鑲なり古代より有る物なり其鑲一總角
 を附不半と古法や宗總角付ふと鳴をいふん其也高勝
 此鑲と云名目諸書より所見なり一函人等々名附一名目ふん
 此鑲一笠印を附く歟と云る事東鑑より見ゆ
 文治五年奥州泰衡征伐之時下河邊庄司行平依
 仰調獻御甲今日持参之間櫃蓋置御前相副紺地
 錦御甲直垂上下御覽之處胄後付笠標仰曰此簡
 付袖為尋常儀歟如何者行平申曰是曩祖秀郷朝
 臣佳例也其上兵本意者先登也進先登之時歟者
 以名謁知其仁吾衆自後見此簡可必知其先登之
 由者也云頼朝卿の時と云古老より問はるゝあは況や今

時其用を知れる人あらんや頼朝卿の時も戰場ゆく胄と
 簡付しと云所見なり中古より至り笠標を胄と付しと云
 事を不聞饒平より以物より其架其鑲と陽色のあけは
 きを付甲の背にわけはきと陰色を用り古實なりと云人
 あ索信と云次古鎧に甲胄と異り於總角付しと未見母
 衣付衣鑲と云又其下と打と云人あり無誓と説り拵と
 後より穴のあふと後より立穴あり下此鑲も饒平鑲を用
 也惣一根と裏より折返し置し鑲鑲ハあ一總角源
 氏打絶品なり亦ハ打唐打等なり
 ○眉庇之事并見揚之事
 上代之眉庇ちうひくなり中古より眉庇ち向し出るなり
 日根野流ちくも眉廂を仕付しと云なり位なり物なり

も戦場を要用を宜くかふ下

上古



ウツムラ

十代内



ウツムラ

中古信類

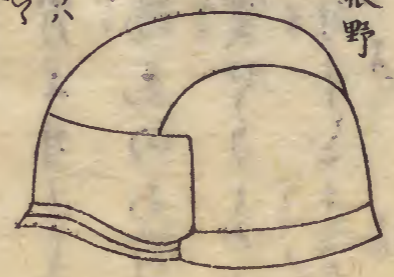


向へ出ル

義類



日根野



信類よりハ
うつむく物
の
ルと云

上古より十代内まじりて眉廂吹返もよ色に革もく包
 単の合せも伏組等を縫山椒鉾も革を打付覆輪をいけ
 きり中古より覆輪をやめて眉廂の端に捻返しとせり
 也前云如くうくんとをりふも穴多く出来て損なう事
 又覆輪の片を斬られハ片はさがり眼より入りて働ふ
 次捻返しとも其患はくくも強きよりあつち中より
 三光の鉾も三所は鑢鉾を打てつち留もも也古代も
 革包以上一後打付不故飭鉾も手薄き物なり大示良
 物に眉廂の上のつち反なり
 見場を朱も塗り古實なりふより左とあふ一きり中古も
 物十よ五は朱塗れを稀よハ黒とわり其外朱ぬりよ金や
 ちり粉又梨子地歌りも時繪よ仕きりも足きり上代も

中古甲冑製作辞書

十七

中古甲冑製作辞書

十六

を作らば古代の風を真似てさうさうの鉢斗造る故腰
 巻と古代の風と後合せよさうさう下り物に質物杯の前
 をい別の鍍を以てして仕さる杯をあり反りさる物也
 手間費中らひ厭ひさる事也古代の大饅頭笠鞍小
 此付し腰巻ハ反り強過る故差物よさうさうてあり此
 ぐん大事れを上古此腰巻を少しも反りて十代内の頃
 に至りて腰巻よ反を付別強さよりかき工夫り鞍を
 糸よらうらうを記以圖を出入古き腰巻よ不用の穴あり時
 々鉛を以埋めたり鍍埋をあり小穴を鍍のらきり埋仕
 てより扱腰巻よ銘の有とありと心得べし天正前後を
 物なり

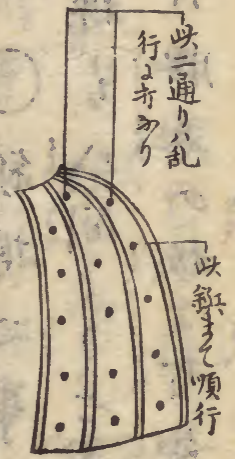
鉢之裏ハケ條

鉢搦之事 天空裏之事 鉢付鍍之事
 要害板之事 忍根緒之事 力革之事
 髪出之事 受張之事

鉢裏を古代の小板塗込め置きたり近代は金箱を
 置きあり尤箱を置と月と通さばと云事あれも焼物に
 をかきこんて置き置事あり由断なく懸さるべし
 以銘ハ多分鉢裡の前後よあり亦眉廂又も腰巻よもあ
 る事あり衆信家此銘も多分年号印形込も彫り衆
 ○ 鉢搦之事

鉢搦を八間より七十二間迄張よ六通よ打りり未の一
 通ハ腰巻の板よ打り衆六通の内下より四通り迄ハ頃行
 よ打りり残る上の二通を礼行かりり勿論是を六十二間

七十二間、張る時の事、行順行乱行、云ハ



圖ハ、はりやう早シ女塊リ、以腰ハ高過たふを下とまり
質を低くするを腰巻を仕直して作れ塊は質せせ
る物、あ然然、ハ鉞数五通、よりりれ、裏の方より
〜〜目利〜〜操、鉞と裏より〜〜揃、細きら
あ〜〜高肉、以有無〜〜裏、か〜〜利、以遠ひあり義類、
高肉より前、二通、打き、あ、高肉故一牧外、當、
せ、れ、バ、リ、以、信、類、ハ、當、鉞、リ、上、代、以、塊、ハ、上、に、留、鉞
ハ、赤、銅、鉞、を、打、き、は、と、あ、此、操、鉞、六、通、事、ハ、筋

塊、事、れ、り、星、塊、ハ、是、と、異、れ、事、

○天空裏之事

ハ、幡、座、以、金、物、の、裏、を、か、一、身、ハ、敷、車、を、と、事、と、あ、
又、ハ、糸、を、入、る、事、と、あ、右、之、内、滑、車、を、入、は、を、直、ハ、又、加
糸、を、入、く、鉢、一、當、所、一、車、を、當、ふ、と、あ、糸

○鉢附鉞之事

鉢、附、鉞、ハ、筋、鉞、を、二、本、宛、〜〜、四、所、一、打、て、鞆、を、と、り、て
鉞、の、根、ハ、割、根、〜〜、折、返、〜〜、車、を、張、る、事、中、古、以、法、也
古、代、ハ、ハ、双、金、具、以、上、一、筋、鉞、〜〜、打、き、り、日、根、野、流、〜〜、
車、ハ、組、緒、を、以、忍、根、緒、を、〜〜、糸、〜〜、留、る、也、丸、壺、留、〜〜、三、所
付、〜〜、也、北、條、流、〜〜、ハ、精、物、を、専、ら、用、る、故、ハ、鍛、を、取、置
〜〜、り、り、表、を、木、瓜、結、び、〜〜、裏、〜〜、留、る、也、常、ハ

解て置れ也又忍根緒以鉄を表一通一巴鉄を入れて雷
不事もあり近世は鍔鉄を以て一本宛打く留る外
本意はあり以鉄附鉄を弱き以利あり物よりきり時
鉄板はれく身を損はるなり夫故鋸鉄を可打なり古
代源平名頃も三尾谷の兎鉄付鉄延抜く鉄付以板よ
う引ちぎるをきりしありめく古も鋸鉄の事を知ふべし今
時の画家よく画くは鉄付板の毛立を引切束を体と
画くと大れら誤りれり威毛はきれぬき板は更より引ち
ぎりとあふよく鉄付以板を引放しきり事明なり画司
不知武器本意よく如此は誤りなりは鉄を二本宛寄て
打事ハ軍中ハ鉄損たふ時ハ急を引入留るを心は儘より一本打
て損しきり時ハ急れ用よ立ざり二本宛四所ハ一本打ハ古實とるべし

○要害之板之事

眉廂の鉄一付は内の方左右一重鍔よりありあり所
あり夫は裏よりあり鍔を仕置し板也稀よきもあり夫は
ひれ落る也

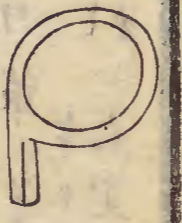
○忍根緒之事

塊以緒を忍の緒と呼事古史雜記にも曾て所見なり泰
平よりりくは名目よりべし諸記録は塊の緒あり忍は緒
ハ不呼忍根緒と云は塊の緒を付は銀の事なり鍔は環中
古も専用いなり着用は徳多し是は二三所附四所附あり中
古三所付多し緒はち留りふハ五所より後より一つは革
組緒を用也日根野流よてハよて紐を用也稀ハ革をも用
ゆりり是も塊は製よりりく腰巻は遠いあり日根野流の

中詰甲冑製作辞書

二二

腰巻の塊は鑲はあり、小護頭のとす外へ腰巻は反するよ、鑲宜し扱
 其鑲鑲を打し習わり前の鑲を眉廂の際（寄く打也腰巻を仕直
 杯あくる鑲を打直次時は兎角後の方へひきしらせく打さるは也眉廂際
 寄打事甚打がさ者なる故也仕直する時よ心を付し眉廂際（寄
 打は裏をかきしは時なりん眉廂（當りて甚仕付かき物
 なり永禄天正の頃ハ必眉廂此際（寄せくあり也後ハ必
 じふと塊抜ふとわれは是第一の所なり近來煮黒赤銅
 杯は類を用也中古の物ニんぶるとわれも又巴鑲を打あま
 じくく鑲はあり強き第一の所なり古き鑲又鑲鑲は
 打直次がより義類の鑲を平ノ打なり鑲の根角根よせき連
 べ廻りする物なり鑲の根をく次よきもて打ぬと鑲邪魔
 よびりりり頭いそむはま



此通りよ外の方へ反らせ根をく次よ摺く角根よ
 べ義類信類もよ此通りあり
 塊の緒長し曲尺九尺五寸五つ附を真中を後ハ締一通を
 く左右一分通し前ハ二重よかり通し違ハはなり四
 は附も同一事也然れども後ハ志はり無故働く時は動
 きづる物也三は附と又より天正慶長頃専ら用ひる
 んて多分三つ附なり四つ附と云と云はは叔緒と上代打
 緒を用ひる御當家もくも岩井製し綿打を御用ひり
 天正慶長の頃糸打斗よあり以外は物も用ひるりりり
 級ももも縮緬布、鞆は志の類中古は物ハ夥敷
 んてりり鞆の調も用ひる物と云節あれども中古用ひ
 る物多くとりり常中縮緬を小口かき巻て用也は

絶品たつひんなり又大巾おほなべを二つ割わりて中真ちゆうまを茜染あざしを入いる事こと
あり麻芋あさづの糸いと入いれ縮緬ちぢみ以もて色次いろついで第だい一いち先まち赤あかさ
かす宜よろし又麻あさの細鎖ほそくさりか入いる物ものあり是こゝを治世ちせい以もて案あんトと見
えきす

扱塊あつかいの緒いとの志こころかり品あひをわきかゆりきり時とき上前まへよりむきく
ハ交まじりむらぬもの也後のち々々むけバ如何いかにわかづて如何いかに緒いと
をむきむらぬものもむけら物もの也被糸あはりかき後のちよりむきても交まじり
留とどめぬ傳でんあり又將まさより士卒しそに至いたる迄まで備真びま黒くろより被あり
方かた有あり是こゝを製作せいさくの外ほか故ゆゑ此書このしよを不あり顯ある因ゆゑ口傳くちゆうの残のこり

○力革之事

力革ちからがを牛滑うしろがを用もちり事ことは馬滑うまが麻滑あしがを思おもひ力革ちからが入い
れハ百重ひやくじゆう利損りそんトさる時ときも宜よろし牛滑うしろがを延のびる事ことハ外ほかハ延のび

ろりり

○髪出之事

受張うけがの後のちハ髪出かみでハ以もて穴あなを明あけ替縁かへぎあふべし中古ちゆうこ必かならずと
わりしとわい塊かたまりを脱ぬぎ君邊きみへ杯さきハ出いるものハ一ひと髪かみより束たば
置おきりかす宜よろし

○受張之事

上代かみハ塊かたまりハ受張うけがハ事ことハ上代かみ塊かたまりハ糸いとハ一ひと圖ずを出いす
以もて故ゆゑ爰こゝハ略りやくト古ふるハ受張うけがハ洗革せんがを用もちひさる云い説せつあり洗革せんが
ト云いハ白単しろたんハ一ひと中古ちゆうこハ物ものハ二重にじゆう布ぬいの百重ひやくじゆう刺さ多おほ幅は志し
廣ひろき布ぬいハ製せい以もて廉れん合あハ一ひと太平たいへい布ぬいハ丈布ちゆうふ
宜よろし何なにも琉球りゅうきゅうの産うり緋ひ凍とう宜よろし近代きんたい縮緬ちぢみを用もちひ
事ことあり若わ緋ひ縮緬ちぢみを用もちひハ萌も黄わうハ糸いとハ刺さト

紅糸と取合悪し、単以受張と氣塞て悪しと云、又輪が林
 めく付る事あり、尤力革と仕付らるる事あり、單縁はされ
 ぬ、松よ心得づ、是も中古あり、事よあり、此條流よ
 て仕出せし事あり、輪が縁追穿通し、單水正結ひを拵先を
 よより輪と輪が縁追穿通し、單水正結ひを拵先を
 漆堅先と志く穿通して留るれり、不好と比たり、百重刺
 方利あり、此北條流の工夫も中古もやけれとも、難
 べく思はる

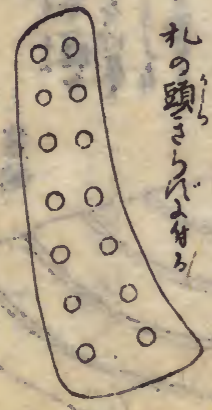
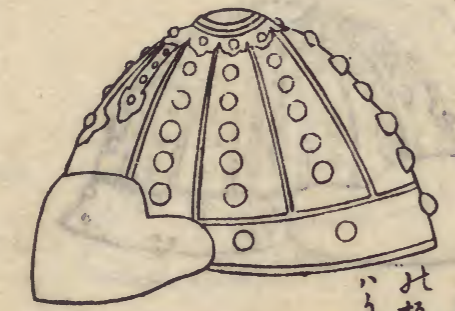
○鞆之事

鞆ハ時代よりりて各形異也

上古の塊腰巻
 此通りふなり
 後合せあり

張様左有板
 此板にて張留星
 此板にて張留星

鞆此形此様



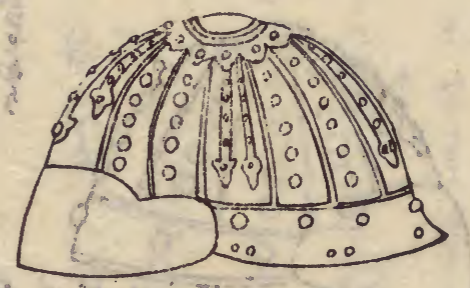
鋒付札先細み
 此札より交りあり
 札の頭より先細み

武州御嶽以二領れ古塊甲州上流曾
 管田天神の指無る塊乃鞆の形共よ同板なり

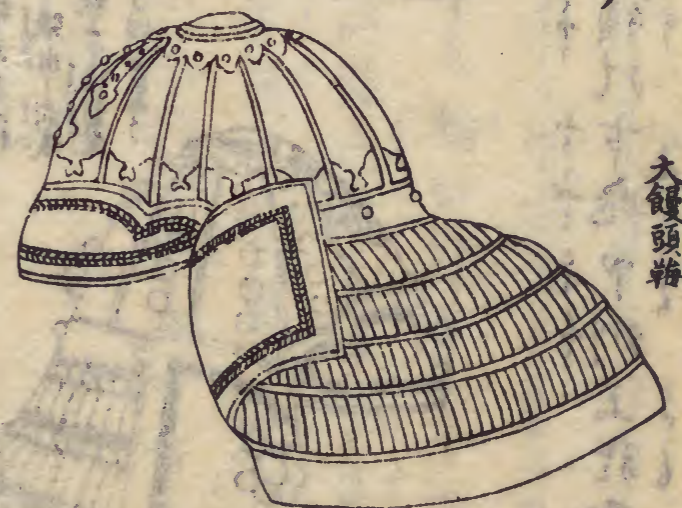
中野甲州製作辨

二五

古代鐵倉時代十代内ハ
塊腰卷此通り及り
て後みて合ふり



大饅頭鞆



腰卷(鞆)を
はき分は
ありて
きり物なり

笠鞆



古代の鞆丸く造りて前の真中より剪て左右一返一きり
物なり夫故吹返一は名あふり軍器よ返の訓嫌忌の言
ふよ古より吹返一は名あふり

中古の塊腰ハ前よ合ふり
中古ハ鞆を腰卷へつはけし付
りり然る故ハ腰卷れ及り鞆
のむらり此所よ透出來り此
透玉を受そ時よ玉れ力をあや
せ剛にせり



小饅頭鞆



此所透來より

一饅頭鞆

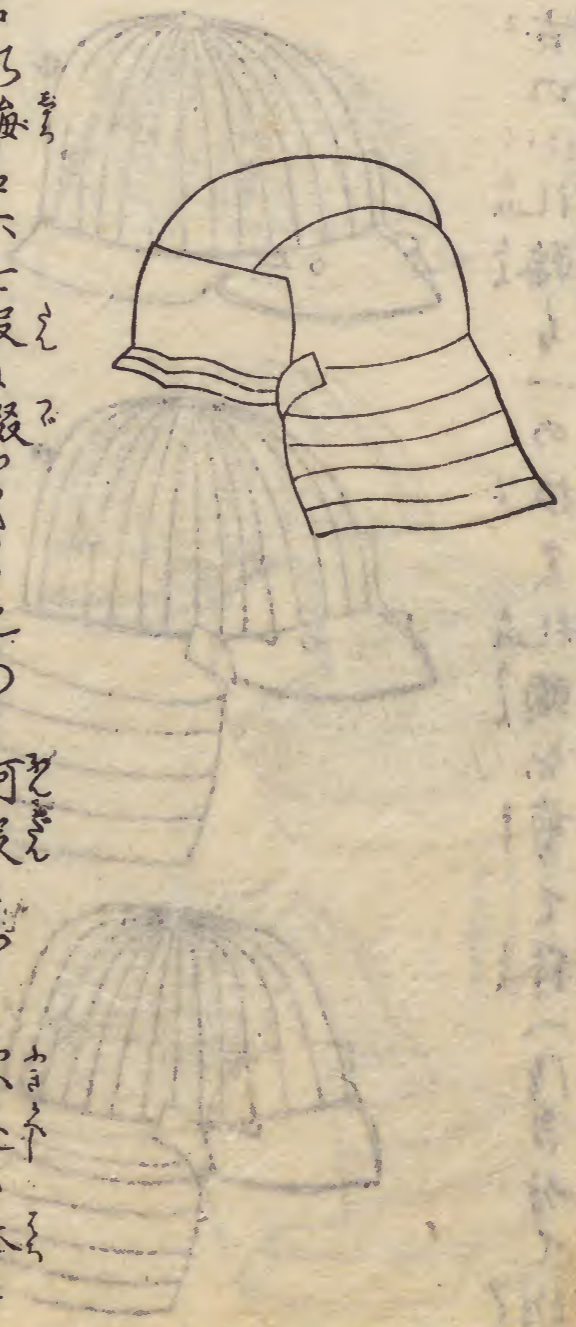
一饅頭ハ鉢付一の板許饅頭よ
引て二の板よりハ日根野形なり
名日根野饅頭よ云

中古の小札鞆一の板裏札頭を剪て鉢へはき附て附る也
夫故よ透出來りり古代ハ札頭をきりて以よはき附て附中
古は物よ剪らぬハ稀也宗安作よ頭を剪ら勢を見せり

中古 根野 鞆 腰巻 及び
かく 左右 吹返 際 合せ

三十一

中古 根野 鞆 腰巻 及び
かく 左右 吹返 際 合せ



中古 以 鞆 七 段 綴 何 段 吹 返 鉢 付 一 段
斗 里 札 古 代 鞆 胴 袖 下 散 鍍 革 此 小 札 又 三 目
札 小 札 三 目 札 事 威 方 此 茶 委 記 出

○ 板物 鍍 鞆 之 事

中古 專 用 用 物 今 調 製 大 鋸 以 古
び 京 打 宜 大 阪 打 大 鋸 鍍 性
よ 奈 良 物 用 大 鋸 以 用 一 片
造 料 九 十 目 斗 物 此 表 目 之 儘 裏
搥 目 之 儘 用 也 尤 煮 掛 物 之 時 事 毛 引 物 不 好
と 云 穴 多 く 故 又 水 漬 時 重 増 之 換 有 鞆 杯
古 作 以 朽 腐 あり 用 新 調 製 之 以 了 八

○ 鍍 小 札 以 鞆 之 事

是 二 番 以 大 鋸 用 也 此 之 生 鍍 故 惡 又 鍍

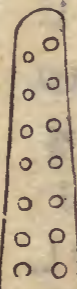
中 古 鞆 製 作 辨 中

三十一

古今事類考

卷之六

此在... 斗を用也右之外... 万割菊一杯... 山出
 一以鍍を用也又鍍鍍とよ... 随分遣ひ古... 鍍の
 先よ... 及鍍あり故剪捨て生鍍斗を用也鋸を両面剛鍍
 此中一熟鍍とく... 物... 故及鍍の所を用ひ鍍鍍ハ
 先の方及鍍斗故強くきく用よき... 剪捨て生鍍以所
 斗を用ゆ也万割菊一以類と志きよき... 延て造るれ
 一鍍鍍 二大鋸 三菊 一云ナリ 菊一以如きハ雜... 何れも表ハヤ... 目裏ハ
 以儘用ゆべ... 水... 大事れり數扁... 次...
 程鍍性堅く... けり古代の鞆と鉢付板斗鍍草交
 めて惣体と鍊車なり鍍斗めく小札よ造ると重過
 看次ふよ不絶... 三つ目札と虎目... 今之煮掛
 之事ナリ小札と毛引
 よ多事本理り繁稀よと三つ目札の毛引小札の虎目を

ある事れり小札三つ目れとも重過る故多くも単斗
 を用也鉢付の板よと必鍍札は入まなく二枚重よ仕る所
 一鉢付鍍打と心得下鍍車以順と草鍍鍍草と云順也
 ○鉢付板と切付小札よ事
 古代も曾く無事れり一の板より五枚迄本小札よ事古
 法手際物也鉢付板の札と  如此せざればむつり
 と... 夫故よ切付小札よ事流儀あり一体切付小札と事
 古代ハ交り... 事よ板物よ小札と見る札よ筋を摺割毛
 引の宛とわけ裏かい... 本小札と見る也... 人任よ
 と... 騒... あり吟味... 古法と唱一... 流
 よ切付よ事あり直よ心を用ひざら故也 古代と中古と
 小札物の鉢付板此打方異なり古代ハ星塊也腰卷此

古今事類考

卷之六

星は障らぬ板の一枚の板は少くも二枚にて仕付たり是を星以
 よる事古賓なり鋒付板の札に頭を剪らば付しり中
 古よりハ鉢付の板に札頭を剪て鞆に腰巻の拾り返しに
 けく付也塊の腰巻の鞆受に反りてははり返す故其あ
 っひよサト透出来也此は矢玉のきりかつけに宜し
 中古あれを用ひり今新製は小札鞆に造らば札の先を前カ
 へりろご出来る板に造るし切付小札と交而不可用當世
 小札と云も切付小札に事也似せ物もさうと板に切目
 入穴多くわけ甚損多き物なり飭置る時斗小札物と足
 へりり吹返しを折返り仕りて椿井清水めくも用
 べりり甚れむ事あり

○一枚鍔を三つ目札に縫延しと事

是と一枚の鍔を馬皮の犬皮をきせて夫をき免込めく穴
 をわけるつけ斗三つ目札の如く去く縫延しと事物なり
 是も似せ物よく不堅固なり物不利

○煉革板物鞆之事

是と最上絶品なり牛に煉革めく素掛に威しそは物也
 右煉革に仕法は牛皮を極上なるを水に漫し叩き爛
 う裏の方をきれきり所を随分去け取表も毛を去き
 斗よと一表ハ強しを持所故大事よと一鞆ハ二枚重
 膠よくはり也阿膠は鍔將水を入れ解とよと云
 説あり鞆膠の絶品を紀伊國に猪の頭の之を用也一又同
 氣相求はりく小ハれか宜しと説ありりはりて用也
 一あり鍔せられはり出る物なり鍛鍔めてありはり

二宜と云古代は五枚の内菱縫板斗を其儘よかきて四枚
 をば車よて冊て置りて四枚を吹返しよて故ら祿バツ
 勢なり吹返し眉廂もよ車よて包之伏組覆輪か紋等を
 うは中古之物よ其饒りて板物よ捻返しをよ眉廂
 吹返等よよ々々覆輪を不用なり金紋を抜落る患あり故に
 吹返よ透し紋時繪紋を用ひせり新調よ時繪紋よよ品々
 あり兎角固き製を用ゆべし先金のやすり粉よ焼金
 と云極品也銀のやすり粉と用ゆ也金銀ともよ粉ハ悪し平目
 と云物あり平目れ三番と云宜し又梨子地紋と云あり是も
 焼三番と云宜し青金と云あり各處りてよ々々随分細
 くするべし高時繪と不好しげ落る患あり低き方宜し扱
 吹返し時繪よよ々々時ハ手蓋杏葉以紋まて同根よよ々々

赤銅粉もあり金よて造るをよ々々一宜きと云あり銀粉
 紋と敷物よ一領物よよ々々箱紋も同断也金具故青
 貝紋如類と中古物よよ々々物よ當りて放れ落
 り患あり故に

○一 饅頭鞆之事

作の塊饅頭鞆を受るもの此腰巻の反りあり故に鉢付板
 一枚斗を饅頭いりよ二板より下は日根野流の鞆
 よありりり圖と前よ出は中古専流行る物よて中
 古に英雄の人此塊多く此形の鞆を用ひきり
 ○日根野鞆之事
 中古日根野織部正比工夫より出る世上専よ用ひきり
 物也得り一と添わく戦具よ益甚多かりて中古は

儘り物今も残る多く世に散在し中古三枚張の塊
此流儀の鞍を付くは歩兵の塊に依るの將師に仁も此
塊鞍を用ひむし衆多あり鞍の段は五枚も七枚九枚も
てよまざる物を足さる古も遠い中古も觀美を求むは働使
利のよま成行し此器は顯然なり中古は文華失くし戰
國の質のよま野風なりホ

○三枚鞍之事

古代よりありしと云ふは三枚塊の緒を去る採とあれし中
古此物も稀しも尺す三枚鞍の時は二寸の羨縫の板を左右二寸
宛剪る古法なり是も弓射を尤も宜しと云近代も三枚鞍
甚多し此條流椿井流清水流等にて專製は三枚鞍
造り二枚吹返り故筋置きり時れ格合宜く見事なり

ゆり也 古代吹返等は大いゆりゆり故中古は英雄
の工夫もく小くゆりゆりゆりゆり鉢形より胴小手脛當
等至る迄利用第一よかきもさる治世は鎧も道具も
きふ時は立派なり故古代は真似て造る事ゆかりあり
れり利用の考り觀美斗に弄ぶ道具なり
○鞍肩摺を縫縁を取衆伏組より事
是も古代交りゆり事ゆり中古も専ら用ひゆり中
古は鞍小くゆりゆり故鞍肩一當なり夫故にゆりゆり
故は縁を取其際一伏組等ゆりゆりゆり中古鞍の肩摺
は板を藍単等ゆり包きり類中古の物も多くあり也
○下散鞍之事
鉢形板も常れ如く二の板より下散ゆり如く裁割て

三下り 四下り 二下り あり 九裏より 鑲を出して 持てるなり 此利
用は 鞆の内 一鎗を 穿入れ ざる 時 便利 宜きと 云 中古の 物
稀に 有物 あり

○志を鞆の事

下鞆と云ふ 譬は 火事 頭中の 鞆の 如く 単なる 水綿等より 造
成内 一鎖を 入る 鞆は 下へ 漆付し して ぎらめり 中古の 物
専用 あり 古代 あり 及び 勞物 あり 岩井 仕立 此物 多く
ある

中古甲冑製作辨中

